

# 現代中国語の方位詞と身体部位名詞との 共起関係について

寺澤 知美

## 1. はじめに

現代中国語の方位詞“里”はある範囲の内部、つまり「内包」の関係を表す働きを持つとされるが、その関係は“箱子里”[箱の中]や“房间里”[部屋の中]のように具体的な空間を表すだけでなく、“小说里”[小説の中]や“这一年里”[この一年(の中)]のようにある一定の範囲、或いは時間といった抽象的な内容を表す場合もある。また、《現代汉语八百词》において指摘されているように、“里”が身体部位名詞と共起する場合には「具体的な部分を指す場合」(例(1))と「抽象的なものを指す場合」(例(2))の二つの意味を表す場合もある。

- (1) 手里拿着一封信 [手に一通の手紙を持っている]
- (2) 手里收集了一些材料 [手元に少しばかり資料を集めた]

(例(1)、(2))は《現代汉语八百词》から引用。但し、体裁は引用者による

一方、現代中国語の方位詞には“里”と近い働きを持つ方位詞として“中、内”なども存在するが、これらの方位詞にはどのような用法上の差異が存在するのであろうか。

- (3) 我从风衣口袋里伸出手，从那系着红领巾的孩子手中接过一张纸片。  
(《人民日报》1993)<sup>1</sup>

[私はウィンドブレーカーのポケットから手を出して、赤いネッカチーフを結んだ子どもの手から一枚の紙切れを受け取った。]

---

<sup>1</sup> 本稿で用いる例文は、主に北京大学汉语语言学研究中心のコーパス<CCL 语料库>によるものである。以下、特に出典の示していないものについては、すべて<CCL 语料库>によるものであるとする。

寺澤知美

(4) 由于各公司的管理大权均掌握在大股东手中，所以……

(《股市基本分析知识》)

[各企業の管理権は皆大株主の手中に握られていたため…]

例(3)は「子どもの手」という「具体的な部分」を表し、例(4)は「大株主の手中」という「抽象的意味」として用いられている。したがって、“中”についても“里”と同様に「具体的意味」と「抽象的意味」の両方を表す場合があるといえるが、“内”については郭振华(1991:454)にも指摘があるように、基本的には「具体的意味」に用いられ、「抽象的意味」には用いられにくい傾向がある。また、“内”が具体的にどのような名詞と共起するかについては、“里”や“中”に比べて制限が多く、少なくとも“手”の場合については「具体的意味」、「抽象的意味」に関わらず、“内”との共起例はほとんどみられない。<sup>2</sup>

また、方位詞“上”は主に「接触」の関係を表し、“里、中、内”のように具体的な空間の内部を表すことはできないが、次の例のように「抽象的意味」において用いられる場合には、“里”によって表される内容と非常に近くなる場合もある。

(5) 好像听说了，我没放在心上。

(杨绛《洗澡》)

[聞いたような気がするが、気にしていなかった。]

(6) 刚才那码事儿，你不要放在心里，他就是这么个脾气。(浩然《夏青苗求师》)

[さっきのあのことは気にしないで下さい。彼はそういう性格なのです。]

本稿では、方位詞“里、中、内、上”と身体部位名詞との共起例の分析を通して、これらの方位詞の使い分け、及びそれによって表される関係がどのようなものであるのかについて考察する。

## 2. 身体部位名詞自体の持つニュアンス

《現代汉语八百词》などにおいて指摘されているように、方位詞“里、中、内”が名詞と共起する際の特徴の一つとして、“里”が口語的な場面において多用されるのに対し、“中、内”は書面語において多く用いられる傾向があることが挙げられる。このような特徴は、方位詞“里、中、内”と身体部位名詞との共起においても、少なからぬ影響を与えて

<sup>2</sup> 身体部位名詞と“内”との共起例については、第2章、第3章を参照。

いると考えられる。例えば、中国語の“目”は書面語的ニュアンスが強く、単独で日本語の「目」の意味を表すことはないが、このような名詞については“里”よりも“中”と共起しやすい傾向がみられる。

- (7) 从小被宠爱、娇惯的子女，常形成目中无人的以自我为中心的扭曲性格，父母后悔莫及而又无可奈何。 (《人民日报》1993)  
[幼い頃から可愛がられ、甘やかされた子どもは、よく「眼中人なし」といった自己中心的な歪んだ性格を形成する。両親は「後悔先に立たず」であり、如何ともし難い。]
- (8) 在我国，所谓“黑道”大多由一些社会闲杂人员构成，目中无法律，头脑中也无“道”可循，他们眼中，只有钱财。 出典:<人民网>  
[わが国における、いわゆる「やくざの世界」は、その多くが社会で定職をもたない人たちによって構成され、眼中に法律なしであり、頭の中に従うべき「道」もない。彼らの眼中にあるのは、お金だけである。]

上の例のように、“目中”の使用例については、“目中无人”のような慣用句的な用法、及びそこから派生した表現などがほとんどであり、<sup>3</sup> 基本的に「抽象的意味」として用いられることとなる。また、“中”と同じく書面語に多用される“内”についても“目”との相性は良いように思われるが、実際には“目”が“中”以外の方位詞と共起する例はほとんどみられない。それは、前述のように“目”が単独で日本語の「目」の意味を表さないことから明らかのように、“目”自体が視覚をつかさどる具体的な器官として用いられにくいことによると考えられる。つまり、“中”と“内”はいずれも書面語において多用される方位詞であるが、“中”と異なり“内”は「抽象的意味」として用いられにくいことから、「具体的意味」に用いられない“目”とは共起しにくくなるといえる。

一方、“目”とは反対に“脑袋”のような口語的色彩の強い名詞については、“中”よりも“里”と共起しやすい傾向が認められる。

- (9) 后来我就在那里发呆，那时候我脑袋里一片空白，一直到背着书包准备上学的刘小青走过来时，…… (余华《在细雨中呼喊》)

<sup>3</sup> 但し、武侠小说の類では使用例もみられる。

“妇人目送着孩子走出门，目中充满痛苦，也充满了怜惜，……” (古龙《小李飞刀》)  
[婦人は子どもがドアを出るのを目で追っていた。その目は苦痛に満ち、そして哀れみの気持ちに満ちていた…]

[それから私はそこでぼんやりとしていた。そのとき私の頭の中は真っ白で、かばんを背負って登校する劉小青がやってくるまで…]

- (10) 他俯下身去察看，发现血是从脑袋里流出来的，流在地上像一朵花似地在慢吞吞开放着。 (余华《现实一种》)

[彼が身をかがめて観察すると、血は頭から流れ出ており、まるで一輪の花がゆっくりと開いていくように広がっていった。]

“脑袋里”については、例(9)のように「抽象的意味」としてだけでなく、例(10)のように「頭から血が流れる」というような「具体的意味」を表す例も含め広く用いられる。<sup>4</sup>

以上のように、名詞自体の持つニュアンスが書面語的であるか或いは口語的であるかによって、選択される方位詞に一定の影響が認められるといえるが、一方で、このような傾向は必ずしも全てのケースについて当てはまるわけではない。例えば、“嘴”と“口”の場合、口語的色彩を帯びる“嘴”については“里”との共起が圧倒的に優勢であるが、書面語的な“口”については必ずしも“中”との共起が圧倒的であるというわけではない。

- (11) 他吃饭时最常做的事情是把掉在桌子上的米粒拾起来放在嘴里。 (《人民日报》1993)

[彼がご飯を食べるときに最もよくやるのは、テーブルの上のご飯粒を拾い上げて口の中に放り込むことだ。]

- (12) 老人嘴里不敢说，心里却很喜欢。 (《作家文摘》1994)

[老人はあえて口にはしなかったが、内心ではとても嬉しかった。]

上の例からも明らかのように、口語的ニュアンスを持つ“嘴”については、例(11)のような「具体的意味」、及び例(12)のような「抽象的意味」の両方において広く用いられる。また、“中”や“内”についても“嘴”と全く共起しないというわけではないが、<sup>5</sup> インフォーマントに

<sup>4</sup> もっとも、“中”との共起も皆無ではない。

“……，一旦离开电脑，脑袋中空空如也，连‘九九表’都不会背，那就糟糕了。”

(《人民日报》1995)

[…ひとたびコンピュータを離れると、頭の中は全くの空っぽで、「九九」さえも暗誦することができない。それではまずいことになる。]

上記の例においては“中”が用いられているが、筆者の行ったインフォーマント調査によれば、“中”よりも“里”を用いる方が適切であるとする意見が圧倒的であり、“脑袋”についてはやはり“里”との共起が優勢であるといえる。

<sup>5</sup> “嘴”の場合には“里”との共起が一般的ではあるが、“中”や“内”との共起例も皆無ではない。

よって揺れもみられ、“里”に比べると使用頻度はかなり落ちる。

一方、書面語的ニュアンスを帯びる“口”の場合には“中”、“里”のいずれの使用も広く認められる。

(13) 【吐血】内脏出血由口中吐出。 (《现代汉语词典》)

[【吐血】内臓からの出血が口から出ること。]

(14) ……，记者们都希望从她口中得到有关邓小平的最新消息。

(《人民日报》1993)

[…記者たちは皆彼女の口から鄧小平に関する最新の情報を聞きたがった。]

(15) 于是他停止了摇船，端起酒杯喝了一口酒，把花生米抓了几颗放在口里细嚼。

(巴金《家》)

[そして彼は船を漕ぐのをやめると、酒杯をとって酒を一口飲み、落花生を何粒かつまんで口の中に放り込み噛み砕いた。]

(16) 谢艳丽口里叹息自己命苦，心里却异常甜蜜。 (《作家文摘》1996)

[謝艷麗は口では自分の哀れな運命を嘆いていたが、内心とても幸せだった。]

上の例から明らかなように、“口中”、“口里”はいずれの場合も「具体的意味」(例(13)、(15))、「抽象的意味」(例(14)、(16))の両方の意味において用いることが可能である。

また、“口”については“内”との共起も可能である。

(17) 漱口时，将水含在口内，鼓动两腮与唇部，使水在口腔内能充分与牙齿、牙龈接触，…… 出典：〈人民网〉

(a) 他的手在口袋里摸索了一阵，拿出什么放入嘴中吃起来。 (余华《命中注定》)

[彼はポケットの中をしばらく探ると、何かを取り出して口の中に放り込んで食べ始めた。]

(b) ……，当她第一次从我的嘴中听到有关一个帅气的男孩子的消息时，……

(陈染《私人生活》)

[…彼女が最初に私の口からあるカッコいい男の子の話聞いたとき…]

(c) ……，因为它上面精雕细刻着神与兽面复合的图形——“兽面神”，嘴内露出獠牙的兽面是一种表象、躯壳，…… (《报刊精选》1994)

[…表面には神と獣面の複合図形である「獣面神」が細密に彫刻されており、口から鋭い牙を覗かせた獣の面は一種の表象、肉体であり…]

上の例のように“中”については「具体的意味」(例(a))、「抽象的意味」(例(b))の両方において用いられ、また“内”についても「具体的意味」(例(c))として用いられる場合があるといえるが、これらの表現に違和感を覚えるインフォーマントも少なくなく、“嘴”についてはやはり“里”との共起が一般的であるといえよう。

[口をすすぐときには、水を口の中に含み、両頬と唇を動かし、口腔内で水を十分に歯や歯茎に接触させるようにして…]

例(17)のように「具体的意味」を表す場合には“口内”が用いられる例もみられるが、“中”や“里”に比べるとその使用頻度は低くなる。

以上のような共起状況から判断した場合、口語的色彩を帯びる名詞については“中、内”との共起に一定の制限がみられるが、一方で、書面語的色彩を帯びる名詞については必ずしも“里”との共起に制限があるというわけではないといえる。また、“内”の使用頻度が“里、中”に比べて全体的に低くなっていることの原因の一つとして、“里、中”が「具体的意味」と「抽象的意味」の両方を表すことができるのに対し、“内”は「抽象的意味」を表す場合には用いられにくいという傾向があることが影響していると考えられる。ここで、本章の分析結果をまとめておく(特に共起しやすい方位詞を枠で囲い、上段に示す)。

【表1】

	目	脑袋	口	嘴
具体的意味	×	里	中、里 内	里 中、(内)
抽象的意味	中	里 中	中、里	里 中

### 3. 思考をつかさどる器官と“里、中、内”

ここまで見てきた身体部位名詞は、いずれも具体的な身体の一部を表し得るものであるが、このような身体部位名詞と思考をつかさどる器官としての“心”を同等に扱うことは適切であるのだろうか。西槇(2005:185)の分析結果によれば、“心”は“里、中、内”のいずれとも共起が可能であり、“里、中”の場合は「抽象的意味」、「内」の場合は「具体的意味」のみを表すとされている。<sup>6</sup> この場合の“心里/心中”の表す「抽象的意味」とは、思考する器

<sup>6</sup> 西槇(2005)では、身体部位名詞と方位詞“里、中、内”との共起状況について、次のような表にまとめている(Jは具体的意味、Cは抽象的意味、-は共起できないことを表す)。

官としての「心」、つまり、実体を伴わない「心」である。このような「心」と臓器の一種としての「心臓」がどのような関係にあるのかについては意見の分かれるところであるが、少なくとも“里”や“中”と共起することによって「抽象的意味」と「具体的意味」の両方を表すことのできる他の身体部位名詞とは性質を異とするものであるといえよう。また、思考をつかさどる器官としては“心”の他にも“脳”、“胸”などが挙げられるが、西槿(2005:185)の分析結果によれば、これらの名詞は“中”としか共起することができず、その場合「抽象的意味」しか表さないとされている(注6参照)。以下、思考をつかさどる器官“心”、“脳”、“胸”と方位詞“里、中、内”との共起関係について具体例を挙げて考察する。

まず、“心”については、西槿(2005)の分析によれば“心内”は「具体的意味」のみを表すとされているが、具体例の提示はない。“心内”の表す「具体的意味」とは、どのような場合を指すのであろうか。

- (18) 六七年前阜外医院医疗小分队开展扶贫支边曾在这家医院做过26例心内直视手术的影响, …… (《人民日报》1996)  
[六、七年前、阜外医院の医療チームが貧困救済と辺境支援を展開し、当院において26例の開胸手術を行った影響は…]
- (19) ……，如果在发育过程中任何原因导致心内结构发育出现停顿、混乱或出生后应该退化的组织未能退化, …… 出典: <人民网>  
[…発育の過程において如何なる原因によって心臓内部の構造の発育に停止、混乱、或いは出生後に退化すべき組織がまだ退化していないなどの事態が引き起こされたとしても…]

“心内”の使用例は、例(18)、(19)のように医学的な記述において用いられることが多く、その場合の“心内”は「心臓」という具体的な臓器を指す。但し、次の例のように「抽象的意味」を表す例も皆無ではない。

- (20) 只有红扑扑的脸透露出一些他心内的感情。 (老舍《无名高地有了名》)

	手	嘴	口	心	眼	胸	肚子	脑子	脑
里	J,C	J,C	J,C	C	J,C	—	J,C	J,C	—
中	J,C	—	J,C	C	J,C	C	—	—	C
内	—	?	J	J	J	—	J	J	—

寺澤知美

[ただ紅潮した顔だけが彼の心の中の感情を表に出していた。]

- (21) 这个价格不仅让业内人士为之震惊,也使竞争对手措手不及,表面尚能保持沉默, 心内却暗暗叫苦,惊叹杀手来袭。 出典:<人民网>

[この価格は業界内の人たちを驚愕させただけでなく、競争相手に対処のしようがない状態に陥らせた。表面上はなお沈黙を守っていたが、心の中では悲鳴をあげ、殺し屋の襲撃に驚嘆していた。]

実際のところ、例(20)、(21)のような表現の成立の可否については、インフォーマントによって揺れがみられる。<sup>7</sup>したがって、“心里”や“心中”と比較した場合、“心内”はやはり「心臓」という具体的な器官としての認識と結びつきやすい傾向があるといえよう。

次に、“脳”の例についてみる。“脳”の場合についても、生理学的な意味での「脳」と思考をつかさどる器官としての「脳」の二つの可能性が考えられる。しかし、“心”については“心里”、“心中”のいずれとも共起が可能なのに対し、“脳”の場合については“中”との共起例が圧倒的に多くなる。

- (22) 我灵机一动, 脑中出现了徐总的名字, 即刻大声说:……

(《人民日报》1996)

[とっさの機転で頭の中に徐总の名前が浮かび、すぐさま大声で言った…]

- (23) 在清醒过来的时候里, 他脑中似乎一团烟雾在缭绕, 然而现在开始慢慢散去。 (余华《一九八六年》)

[意識をとり戻す間、彼の頭の中はまるで煙霧が漂っているようであったが、今それはゆっくりと消え始めた。]

例(22)、(23)の“脑中”は、いずれも思考をつかさどる器官としての用例(「抽象的意味」)であるが、次の例のように「具体的意味」を表す例もみられる。

- (24) 但与人类终生具备学习能力不同, 鸟类一旦掌握了发声的规律技巧, 其脑中负责学习部分的区域便自动停止活动。 出典:<人民网>

[しかし人類が学習能力を一生維持できると異なり、鳥類はひとたび発声の法

<sup>7</sup> 「抽象的意味」を表す“心内”は、“王力宏《我是你心内的一首歌》”や“方怡萍《心内只有你》”のような歌謡曲のタイトルなどにおいても使用例がみられる。但し、このような歌のタイトルなどに用いられる場合については、修辭的効果を狙った特殊な用法である可能性もあり、必ずしも一般的な用法であるとはいえない。

則とテクニックを習得すると、脳内において学習を担う部分が自動的に活動を停止するのである。]

例(24)の“脳”は生理学的な意味での「脳」として用いられているが、インフォーマントによって揺れもみられ、「具体的意味」を表す場合にはやはり次の例(25)、(26)のように“内”が用いられることが多いといえる。

- (25) 电极和一根圆珠笔芯粗细相当，从人脑顶部附近直插入脑内。

出典:<人民网>

[電極とボールペンの芯の太さは同じくらいで、頭頂部付近から直接脳内に挿入する。]

- (26) ……，这些人多数有高血压病史，发病时血压往往显著升高，同时随着脑内出血部位的不同，症状还会有差异。 (《人民日报》1995)

[…これらの人の多くが高血圧の病歴を持っており、発病時にはしばしば血圧が著しく上昇する。また脳内の出血部分の違いにより、症状に差異も生じる。]

また、次の例(27)のような“脳里”の使用例も皆無ではないが、前述のようにやはり基本的には“中”が用いられることが多い。

- (27) 浅红色的花朵似乎刺痛了我的眼睛，我的脑里渐渐地浮起了另一张带着凄哀表情的美丽的面庞。 (巴金《家》)

[淡い紅色の花はまるで私の目を刺すようであり、私の脳裏には次第にもう一つの物寂しい表情の美しい顔が浮かんできた。]

但し、同じ思考をつかさどる「脳」を表す名詞についても、口語的ニュアンスを帯びる“脑袋”(例(9)、(10))や“脑子”のような場合には“里”との共起が優位となり、「抽象的意味」だけでなく「具体的意味」としても広く用いられる。

最後に、“胸”の例についてみる。この場合についても、理論的には人間の身体の一部である「胸」という具体的な部分を指す場合と、“心”と同じく実体を伴わない「抽象的意味」を表す場合との二通りが考えられる。

まず、“胸”において「抽象的意味」を表す場合については、“脳”と同じく主に“中”と共起することが多い。

- (28) 但教练似乎胸中有数，对她并没绝望，又给她半年时间“以观后效”。

(《人民日报》1994)

[しかしコーチには心積もりがあるようで、彼女に対して決して絶望することはなく、さらに彼女に半年間の時間を与え、その後の行いを観察した。]

- (29) 只能静候机会，等他们提出无理的要求时，给他们一个干脆的拒绝，稍泄胸中的闷气。 (钱钟书《上帝的梦》)

[ただ静かに機会を待って、彼らが無理な要求を出したとき、彼らをきっぱりと拒絶して、少しばかり心の憂さを晴らすしかない。]

“胸中”が用いられる場合、例(28)のように成語の形(“胸中有数”の他にも“胸中无数”、“胸中甲兵”など広く用いられる)で現れる場合や、例(29)のように「胸の内」、「心」の意味で用いられることがほとんどで、「具体的意味」とは結びつきにくい。“胸”において「具体的意味」が表される場合には、“心”や“脳”と同様に“内”と共起することが多い。

- (30) 由于罪犯用力过猛，9毫米长的刀尖折断在马建军的胸内。

(《人民日报》1995)

[犯人が力を入れすぎたため、9ミリの刀尖が馬建軍の胸の中で折れた。]

- (31) ……;就是这双手,完成了我国第一例食管癌切除及胸内食管胃吻合术;……

出典:<人民网>

[…まさにこの両手が、我が国初の食道がん切除および胸部食道胃吻合手術をやり遂げたのである…]

以上のように、“胸”については、「抽象的意味」を表す場合には“中”が用いられ、「具体的意味」を表す場合には“内”が用いられる傾向がみられるといえる。<sup>8</sup>

思考をつかさどる器官と方位詞“里、中、内”との共起状況は以下の通りである(特に共起しやすい方位詞を枠で囲い、上段に示す)。

<sup>8</sup> 但し、“胸里”の使用例も皆無ではない。

“在那些时候，我们的眼前现露着黎明的将来的美景，我们的胸里燃烧着说着各种语言的朋友们们的友情。” (巴金《巴金自传》)

[あの頃、私たちの目の前には黎明の未来の美しい景色が広がり、私たちの胸の中は様々な言葉話を話す友だちとの友情で燃えていた。]

上の例は「抽象的意味」を表す用例であるが、このような用例に違和感を覚えるインフォーマントも少なくなく、“里”よりも“中”を用いる方が自然であるとする意見が多かった。

【表2】

	心	胸	脳
具体的 意味	内	内	内 中
抽象的 意味	里、中 (内)	中 里	中 里

#### 4. 思考をつかさどる器官と“里、上”

先の第3章では思考をつかさどる器官として主に“心”、“胸”、“脳”の三つの例について考察を行ったが、同じ思考をつかさどる器官であっても、中心的な役割を果たす“心”とそれに準ずる役割を果たす“胸”、“脳”では扱いは異なる。例えば、“心”については“上”との共起においても「抽象的意味」が表される場合がある。

(32) 好像听说了, 我没放在心上。 (例(5)再掲)

例(32)の“心上”は“上”を“里”に置き換えることが可能である。つまり、“心”の場合は“上”と“里”のいずれも「抽象的意味」を表すことが可能であるが、それに対して“胸上”の場合には具体的な身体部位との「接触」の関係が表されることが多くなる。

(33) 此外, 仰卧睡眠两手常常会放在胸上, 这样还容易做噩梦。

出典:<人民网>

[この他、仰向け就寝は両手を胸の上に置くことが多く、悪い夢を見やすい。]

一方、“脳”についてはそのまま“上”と共起して「接触」の意味を表す例はほとんどみられない。これは、“脳”自体の持つ特徴から、直接何らかの物質と接触するという状況が想定されにくいことが関係していると考えられる。したがって、“脳”が“上”と共起する場合、位置的には“脳”のある部分を指すが、実際には“脳”の外側、つまり「頭」のある部分との「接触」関係を表す場合などに用いられることが多い。

- (34) 这个女孩根本就没有看到刚才的雪球，我是扔在她的后脑上，并且马上就碎了。  
(余华《在细雨中呼喊》)  
[この少女は全くさっきの雪球を見ていなかった。私はそれを彼女の後頭部に投げ、しかもすぐに砕けてしまったからだ。]

以上のような“胸”、“脳”の例から、通常これらの名詞が“上”と共起する場合には具体的な身体部位との「接触」の関係が想起されやすい傾向があるが、一方で、“心”のように具体的な身体部位と結びつきにくいものについては、「抽象的意味」としても用いることが可能となると考えられる。但し、“心”と“上”との共起状況は“里”の場合ほど自由なものではなく、その使用範囲は比較的限られたものとなっている。保坂・郭(2000:246)は、“心”との共起における“里”と“上”の使い分けについて、次のように説明している。

“心”の場所化では心という器官として用いるなら“～里”が使われ、“～上”を用いることはできない。すなわち、モノを考える器官であれば二次元ではありえず、ぼんやりと三次元のカタチが意識されるからだと言明できる。(中略)しかし「思考する、考える、感情をつかさどる」「心に留める」「心の片すみ」などのように器官としての意味からはなれ、単なる「心という場所」ととらえるなら“～上”を使い、“～里”を使うことは出来ない。

保坂・郭(2000)の分析によれば、「心という器官」として用いる場合には“里”のみが用いられ、単なる「心という場所」を表す場合には“上”のみが用いられるという明確な使い分けがあることになる。なお、保坂・郭(2000)は次のような例文も提示している。

- (35) 心里(\*上)是这么想的,嘴上就说出来了  
[頭(心)で考えたことが、口からすぐ出てきた]  
(36) 心里(\*上)难受 [心苦しい、つらい]  
(37) 不把这事放在心上(\*心里) [こんなことは心に留めるな]

(中国語例文、日本語訳共に保坂・郭(2000:246)による)

確かに、上の例以外にも“心里不安”、“心里踏实”、“心里发疼”など“上”よりも“里”と共起しやすい例は多くみられ、保坂・郭(2000)が指摘するように、そこには「単なる場所」ではなく、「思考をつかさどる器官」として用いられていることが関連しているようにも思われるが、一方で「思考をつかさどる器官」としての“心”と「単なる場所」としての“心”は、それ

ほど簡単に分けられるものではない。例えば、例(32)、(37)の“放在心上”という表現は、“上”だけでなく“里”と共起して用いられることも少なくない。

(38) 刚才那码事儿，你不要放在心上，他就是这么个脾气。 (例(6)再掲)

例(38)の“放在心上”の“心”は「思考をつかさどる器官」であるのか、それとも「単なる場所」を指しているのだろうか。

一方、“心”との共起において“上”がよく用いられる例としては、“放在心上”の他にも“挂在心上”、“记在心上”などが挙げられるが、いずれも「場所」としてのニュアンスが強いように感じられる。しかしながら、次のような例もみられる。

(39) 妻子看在眼里，痛在心上。 (《人民日报》1996)

[妻はそれを見て、心が痛んだ。]

例(39)は「心」という場所が痛むという理解が可能なことから、当然“上”との共起が可能となると考えられるが、一方で、インフォーマントによってはこのような“上”の用法に違和感を覚えるようである。つまり、「単なる場所」を指すように思われる場合についても、無条件で“上”との共起が可能となるわけではなさそうである。また、前述のように“放心心～”には“上”がよく用いられるが、一方で“里”を用いることも可能である。両者はどのように使い分けされるのであろうか。ここで、仮に“里”への置き換えが難しくなる場合について考えてみる。例えば、次の例(40)のように友人等にちょっとした頼み事をする際に、「覚えておく、気に留めておく」というような意味で用いる場合については、“放在心上”を用いるのが自然であり、“放在心里”を用いると違和感が生じる。

(40) 甲：有谁知道什么时候重播啊？

[いつ再放送するか誰か知っていますか。]

乙：帮不上了。抱歉！

[お役に立てません。ごめんなさい。]

甲：没关系，大家帮我放在心上就行了。谢谢。(→??放在心里)

[かまいません。みなさんが気に留めておいてくれればそれでいいです。]

ありがとう。]

上の会話は、インターネットの掲示板でのやりとりの一例である。このように、相手に軽く気に留めておいてもらうというような場合には“里”よりも“上”と共起しやすい傾向があるとい

寺澤知美

える。一方、反対にしっかりと心に留めておく必要がある場合には“上”は用いられにくくなる。齊沪扬(1998:41)は次のような例について、“里”のみが用いられ“上”は用いられないとしている。

(41) 这句话牢牢地记在心里(\*心上)

[この話をしっかりと心に刻みつける]

(齊沪扬(1998)から引用。但し、体裁は引用者による)

以上のようなことから、“心上”と“心里”の選択には“上”、“里”自体の持つ特徴が大きな影響を与えていると考えられる。つまり、“心上”の場合には“上”の持つ「接触」或いは「表面」のイメージから「表面的、軽い、一時的」といったニュアンスと結びつきやすくなり、一方の“心里”の場合には“里”の持つ「内包」のイメージから派生して、「内的、堅固な」といったニュアンスと結びつく。したがって、“心”の後ろに“上”が用いられるか、それとも“里”が用いられるかについては、話者の心的態度が少なからず反映されるものであるといえよう。

## 5. おわりに

本稿では、身体部位名詞とそれに後置される方位詞“里、中、内”、及び“上”との関係についてみてきた。その結果、まず“脑袋”や“嘴”のように口語的色彩の強い身体部位名詞については「具体的意味」、「抽象的意味」に関わらず、“里”が用いられやすい傾向があることがわかった。このような傾向については、方位詞“中、内”が書面語的ニュアンスを持つことから当然の結果といえよう。一方、“心”、“胸”、“脳”などの思考をつかさどる器官、或いはそれに準ずる役割を持つ名詞については、「抽象的意味」としてではなく、本来の身体部位を指す場合には、“内”が用いられやすい傾向がみられた。但し、“内”の全体的な使用頻度は“里”や“中”に比べると低いものとなっており、それは“内”が基本的に「抽象的意味」を表す場合には用いられないことが影響していると考えられる。また、第5章では思考をつかさどる器官と“里”と“上”との関係について考察を行った。“上”の持つ「接触」の関係を表すという特徴から、物理的な対象との接触関係に結びつきやすい傾向がみられるが(“胸”、“脳”)、“心”については具体的な身体部位のイメージに結びつきにくく、「抽象的意味」を表すことも可能となる。但し、使用範囲の広い“里”に比べ、“上”に

については「接触、表面」というイメージから、その使用に制限があるといえる。したがって、“放在心上/里”のように“上”、“里”のいずれも用いることが可能な場合についても、話者の認識によって使い分けされることになり、ちょっと気に留めておくというような軽いニュアンスで用いられる場合には“上”が用いられ、反対に心の中にしっかりと置いておくというような場合には“里”が用いられると考えられる。

### 主要参考文献

- 呼美蘭2000. 「身体名詞に関する一考察」『中国語学』 247
- 高橋弥守彦1988. 「方位詞“上”と“里/中”について」『外国語学会誌』 No.17 大東文化大学外国語学会
- 保坂律子・郭雲輝2000. 「名詞を場所化する方位詞“～上”と“～里”」『中国語学』 247
- 野内良三2000. 『レトリックと認識』 日本放送出版協会
- 郭振华1990. 〈方位詞“内”和“里”〉《第三届国际汉语教学讨论会论文选》北京语言学院出版社
- 吕叔湘主编1980. 《现代汉语八百词》 商务印书馆
- 吕叔湘1984. 〈方位词使用情况的初步考察〉《汉语语法论文集》(增订本) 商务印书馆
- 罗日新1987. 〈“里、中、内”辨异〉《汉语学习》 第4期
- 齐沪扬1998. 《现代汉语空间问题研究》 学林出版社
- 西槿延子2005. 〈“里”“中”“内”的比较研究〉『中国語學研究「開篇」』 vol.24
- 邢福义1996. 〈方位结构“X里”和“X中”〉《世界汉语教学》 第4期

